

## 南シナ海死闘記

福島県 小檜山 友喜

私は大正十二（一九二三）年三月十一日、福島県喜多方市岩月町檀野字中堀で生まれました。

昭和十九（一九四四）年五月十五日、横須賀武山海兵団へ仮入隊し約一週間位在隊した。（横徴水八一七八七一番）

私が入団した当時のわが家の家族は、次のようでした。

父	健在	農林業
母	〃	〃
本人	〃	〃
妹 二人	〃	〃及び学校
弟 三人	〃	〃

父母共に若く元気で、兵役のため私が抜けた穴を補っていたので、家庭の生活に大した影響はな

かった。

海兵団に入るため郷里を出発した日のことを回想すると、陸海軍合わせて五人の壮丁がお宮に集まりました。町長さんや部落の指導者たちの激励の挨拶を受け、五人の壮丁の代表者が元氣いっぱい出陣の辞をのべて、町民や婦人会、学童らの歡呼の声の中を尽忠報告の誓いも固く列車に乗って故郷を後にしました。

父は言葉少なく「頑張つてこい！」と、母も「行つてこい！」と未練はありませんでした。

武山海兵団より静岡県新居市の浜名海兵団にて新兵教育を終了しました。私共の教班長が人柄が良かった人で、大変助かりました。噂に聞いた数々の無情な苦痛を伴う制裁や躰は行われず、今から考えても苦勞の種は無く、有難い事と感謝をするばかりです。

勿論、海軍特有の精神修養棒はありましたが、直径が大きく、尻に当たった時の衝撃も緩和され助かりました。また浜名湖でのボートの練習もよ

くやりましたが、楽なものでした。

浜名海兵団での教育が終わると、海南島警備陸戦隊との命をうけ、昭和十九年九月一日、横須賀海兵団へ仮入隊です。十月二十日頃呉海兵団へ陸送。十月二十二日客船「浅間丸」（三万トン）に乗船、上海港へ入港し、三日間止泊のち出港す。海南島へ行くのかと思っていると、フィリピンのマニラへとか。航行中は敵潜対策に爆雷投下しながら行き、無事マニラ港へ着く。「浅間丸」乗船中は勤務は一切なく楽チン楽チンでした。

マニラに上陸後仮入隊して防空壕掘り作業に従事する。マニラの港には真つ赤な船体をさらして沈んでいる日本の船舶（米軍の攻撃により沈没したもの）の数の多いのを見て、戦友と私語して内心の心配——戦局の行く末——を言っても、現実にはどうにもならないこと。私共の受けて来た教育は勝つことで、負けることは考えないのだと肚をきめる。

マニラにいる間、海軍病院の看病の手伝いでしばらく居た。寝台毎に蚊帳を吊りマラリアを防いでいた。火傷をした人が多かった。船が沈むとき燃料の重油が海面に浮かび広がり、燃え出して火災となる。船に乗っていた人は海に飛び込み、波間を漂っている間に、重油の火災に焼かれて、救助されても火傷のため苦しむと言う。しかも、火傷面積が三分の一以上超えると死亡とか、恐ろしいことだ。

昭和十九年十一月十五日頃貨物船（七〇〇トン）に乗りマニラを出港。十七、十九日頃南シナ海の西沙諸島附近で敵飛行機に発見され、その夜友軍の貨物船二隻。私の乗った船は後の船。前の船が敵の雷撃で火災になり、後の私の乗った船は総員見張りに甲板に上がった時、敵の魚雷二発を発見する。一発は船の前部の喫水線の浅い船底を潜り抜けてそれで行ったが、二発目が船の中央部へ命中した。船が折れたようになり見る間に沈ん

だ。轟沈というべきか。三分以内に沈むのを轟沈と称したと。

私はかねてより船が沈む時、海中へ飛び込むには船の内側をさけて外側を選べと教えられた。私は船腹の鉄板がさらされて、ちょうど滑り台のようになっている所から海中へ入り、船からできるだけ遠くへ離れるように泳いだ。船が貨物船だから荷物を積み込んだハッチを覆うように足場板のような長い板が沢山ある。その板にしがみついても波間を漂うばかりである。一枚の板に何人もがしがみついても助かりたいと話し合う。島は見えない。じつと浮いて生きている。寒くなって自分の体が小さくなって行く感じ。

十時間余りも経過した頃やっと海軍の救助艇が二隻来て、順番に海中より救い出す。海中にいた時間が長いので完全に自力で艇に上られる者はいない。救助艇員にたすけられている者ばかりである。水中から上がると水上の気温より水中の方が温かいのを感じる。と言ってまた水中へ戻ること

はできぬ。身をかがめて寒さを防ぐ。

救助され艇上で安居している間の話。仲間に朝鮮人が何人かいた。彼らは艇へ上がると胸のポケットから海水で濡れた紙幣を一枚一枚拡げて艇にペタペタ貼って乾かしていた。日本人にはあまり見ないやり方であった。

海南島には海軍の病院がないので、ベトナムのサイゴンの病院へ仮入院。この病院には約三週間いた。この病院での見聞記は左の通り。

我々がサイゴンの病院へ入る以前のこと。カムラン湾の南シナ海で輸送船が敵の魚雷にやられた。沢山の人が火傷をしてサイゴンの病院に入院した。火傷の面積が広く大きい人が多い。調査員の私の体験では、陸軍の人でビルマ、ニューギニア、フィリピン等の戦線で生ける屍と化した悲惨な例を多々話で聞いた。ところがここサイゴンの海軍病院では火傷で重症重体に陥った人が多く、鼻や口の中から生きながらにウジが出ている。私

はそんな人を見兼ねてウジを指でつまんで取り除いた。本当の話です。

昭和十九年十二月十日頃サイゴン出港（漁船を改造の船で）、十二日頃ツウランで爆撃にあう。海中に投げ出されたあと、附近の陸に住む原住民のお梔舟（一寸法師）に助けられて上陸し、ツウランより陸送でキノンへ。キノンには海軍部隊があるので、そこへ仮入隊す。一週間位でジャンクの帆掛船で海南島へ。終戦は海南島で聞いた。上司令長官より下は我々兵まで皆涙を流して茫然自失であった。

私は終戦後は海南島司令部の従兵となりました。やがて、昭和二十一年四月十五日、和歌山県の田辺港へ上陸帰国しました。

田辺港で私は福島県まで帰るので、途中の東京駅まで参謀長の千田少将の荷物を持って一緒に帰り、東京の自宅へ一泊させて頂いて別れました。

南方での戦場のことをあれこれ思い起こすと、

サイゴン——ツウラン附近の海上でのこと。陸地に沿って航行中、米機の空襲を受けて船の前半部に乗っていた人員（私もその内の一人）は幸いにも無事で、先述のお梔舟で陸地へ逃げたが、後半部の人員は爆弾の直撃にあって全員戦死という悲惨さ。乗船する時に、前半部とか後半部とか深く考えることなく只簡単に乗ったが、運であろうか？ 何とも言えない。

さて、船は爆撃されて大破、航行は停止し、船底を浅い海底に着けて沈まない。敵は沈まない船めがけて機銃をしつこく射っている。船底が着地しているのが判らないので、いつまでも射っている。「おー！ もつと射て、もつと射て」と、高見の見物よろしくの体であった。

私の新兵教育は主として陸戦訓練。手旗信号も少しやりました。銃剣術の選抜大会（一〇〇人位いた）では最後の一人になって優勝です。上官から褒めて頂き賞品としてタバコの光を一カートン

授与され、皆で分けてのみました。

さて、東京を出て、郡山、会津若松と帰り、喜多方駅の近くの親族の家で食事をしました。外米とは違い内地米は油こい味がして、副食物なしでも十分の感じでした。

留守宅では父は在郷軍人会の会長をしていた。私の無事帰国の喜びをおさえ気味にして幸福をかみしめていた。

家には大和毛織会社の従業員の人が六人いた。疎開で東京から来ていて、年末までには皆、東京へ戻って行った。

復員後、昭和二十一年十二月十五日、結婚した。現在、女・男・男と三人の子供、八人の孫、妻と皆元気で暮らしています。

最後に南シナ海方面での私の戦場経験を振り返って見ると、天佑というか、武運長久というか、とにかく怪我一つなしに五体満足に復員して、戦後の平和な毎日に恵まれて一族が安楽に生

活をしています。

幾十万、幾百万の英霊のお陰様と感謝してもらえない気持ちでいっぱいです。また生ある限り死ぬまで、祖国のため、孫や子の安楽のため、正々堂々と生き抜いて行きます。

### 散った桜に散る桜 残る桜も散る桜

石川県 榎田 弘明

父は私が十五歳の時に死亡、長兄は軍隊へ行つて、姉五人、妹一人、私は次男、家族で親を助けていた自作農であつたが、兄は内地で教育係をしていたが、昭和十七（一九四二）年に除隊して帰宅した。

その昭和十七年には、私は徴用に取りられるので予科練を志願した。家業は、帰ってきた兄や姉がやってくれていた。第一次試験は（石川県で二十